



Title	古今集時代における新歌材の形成
Author(s)	蒲, 姣艶
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87781
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 蒲 姢 艶 ）	
論文題名	古今集時代における新歌材の形成
論文内容の要旨 一、古今集時代における「松に藤」の構図形成について―「藤詠」の変化との関わりを中心に― 「松に藤」という屏風絵（歌）が古今集時代に流行しはじめ、その後、長く後世に受容されていく。先行研究では、「松に藤」という屏風絵は唐絵から来たものだと指摘している。しかし、何故古今集時代に流行が見られたのかについて言及していない。本節では、「松に藤」という屏風絵（歌）が古今集時代に流行しはじめたという現象に着目し、その要因について考察を加えた。その要因として、まず考えられるのは「藤」詠の変化である。万葉歌では、藤が詠まれる和歌は二十六首あるが、「藤のむらさき」という藤の色彩はまだ定着していない為、「藤のむらさき」がまだ詠まれていない。白氏の影響で、忠臣・道真の漢詩において、「藤のむらさき」が定着し、その後屏風歌にも「藤のむらさき」が詠まれはじめた。その後、「松に藤」に関する和歌でも「藤のむらさき」と「松の緑」を対比的に捉えている。言い換えれば、「藤のむらさき」が定着することが、「松に藤」の屏風絵（歌）の流行を促したと考えられる。 二、古今集時代における「あやめ草の根」の創出 『貫之集』には、同集を初出とする「あやめ草の根」という表現が五例もあり、これらはあやめ草の根が長いことと命が長いことをかけている。一方『貫之集』以前には、「あやめ草の根が長い」表現自体はないが、植物の根が長い和歌は五例ある。いずれの菅の根が長いことに春日が長いことをかけるもので、長寿の要素は見えない。また、「あやめ草」は五月五日行事にとって不可欠な物であるが、「菖蒲草の根」についての文言が漢詩や儀式書にも見えない。和歌にも漢詩にも用例のない「あやめ草の根」だが、中国本草類では、薬草として多用されている。薬草としての「菖蒲根」は延年・不老の効果があるため、中国の神仙伝類に霊草として応用されて、『列仙伝』・『抱朴子』・『神仙伝』などで用例が確認できる。菖蒲根を服用することにより、長寿・長生となる。このような神仙伝は日本にも渡来した（『日本国見在書目録』を参照）。このような神仙伝を背景にし、『新撰万葉集』に霊草としての「菖蒲」が二例ある。また、平安知識人の手によって作られた神仙伝『浦島子伝』では、霊草として「菖蒲根」例も見える。さらに「菖蒲根」には長ければ霊草としての価値が高いという性質を持っている（『列仙伝』『抱朴子』など）。このような漢文受容状況において、官吏として漢文知識を備える貫之により、和歌表現「あやめ草の根が長い」表現が生まれてきたのである。 三、古今集時代における「松を引く」表現の出現―子日行事との関わりを中心に― 古今集時代に初めて「松を引く」表現が見られる。本節では、「松を引く」という新しい表現に着目し、この表現はどのように形成されてきたのかを検討する。万葉集には、松詠は四十七例見られ、古くから、愛誦されるが、そこから派生して、「松を引く」表現が生まれた可能性が薄いように思われる。 「松を引く」表現は子日行事と深く関わっていると見られる。平安時代に見られる子日行事の端緒と思しい寛平八年宇多天皇の子日野遊では、野辺の松が取り上げられているが、「松を引く」表現はまだ見られない。宇多天皇の子日野遊の影響を受け、その後、子日に関する和歌では、野辺の松が多く詠まれる。 一方、野辺の松を引き抜き、家に植える例も見られる。「松を引く」表現は、子日行事に野辺から松を引き抜き、家に植えることに応じて、生まれてきたのではないかと考えられる。その背後には、道真の序に見られる長寿の要素も働いている。小松を野辺から引き抜き、家に植えて、その成長と千年の寿命に人の長寿を祈ったものと考えられる。「松を引く」表現には、宇多天皇の子日野遊や道真の序が関わっていたのであろうが、和歌の表現からは、それとの相違をも見出せる。 四、古今集時代に見られる〈もみぢ〉の色彩が歌材として詠まれる経緯と展開 万葉集において、〈もみぢ〉の表記が主として「黄葉」などの「黄」系統の文字によってなされている。それにつ	

いて、小島憲之氏が中国六朝以来の通行文字の導入であろうと説かれて以来、通説となっている。小島説に首肯しながらも、果たして、漢語「黄葉」と和語「もみぢ」の二語は同じ内実を持つものなのかという疑問が残る。漢語「黄葉」に絞って見ると、それが黄色に変色するという色彩の表現であることがわかる。万葉集の〈もみぢ〉詠の具体例をみると、草木の名を特定せずに、ただ〈もみぢ〉とだけ言う例の多いことや、特定の植物の〈もみぢ〉からその色彩が特定できないことや、〈もみぢ〉を詠む和歌には「色づく」「もみつ」といった表現は多いが、その色彩が具体的に明示されていないことから、和語〈もみぢ〉は、「葉が色づく」という概念を表すものと考えられる。他方、秋の山は「くれなゐ」と表現されることや、〈もみぢ〉と「さにつらふ」「にほふ」との組み合わせから、〈もみぢ〉は赤系のものであると間接的に推測できる。

しかし、このような間接的表現がそのまま古今集時代に見られる〈もみぢ〉の「紅」色が歌材として詠まれる現象に繋がると判断を下すのはまだ早計であろう。漢詩文の影響があるかどうかをなお検討する必要がある。平安漢詩文において、白詩の影響により、道真あたりから「紅葉」例が増加する。その現象と並行して、ほぼ同時期に和歌では、〈もみぢ〉の「紅」色が詠まれるようになる。これは、白詩に見られる「紅葉」が、色彩対比や比喻表現に用いられ、その「紅」が強調されるという詠法に刺激されて生まれてきたものかと考えられる。一方、その受容の根底には、万葉時代に形成された秋山が紅という認識が流れているかとも考えられる。そして〈もみぢ〉の「紅」色が詠まれた直後、「紅」を媒介にして、それは掛詞となり、また染料の「紅」、「紅の涙」に繋がって、新たな展開を見せている。

五、古今集時代に見られる「くれなゐの涙」を巡る再検討

「くれなゐ」も「涙」も万葉集では愛誦されているが、しかし「くれなゐ」と「涙」とが結びつけて和歌に詠まれるようになるのは古今集時代に入ってからなのである。このように、万葉集になく、古今集時代に集中的に詠まれるようになる「くれなゐの涙」の形成には、漢語「紅涙」「血涙」に影響されている可能性は考えられる。

一方、それらの和歌の詠み方には、「くれなゐの涙」に染料の「くれなゐ」が掛けられていることと、涙そのものが白玉の涙から「くれなゐ」の涙に変色することの二つの特徴が見られる。この二つの特徴は先行の万葉歌ではまだ見られないものである。また「くれなゐの涙」詠に影響したと指摘されている漢語「紅涙」「血涙」例でも、確認できない。この二つの特徴の形成には、古今集前夜から見られる「血の涙」の詠み方が大きく関わっていると考えられる。

古今集前夜から、血の色の「紅」が目される中で、血をその色の「紅」と表現するようになる。「血」の色を「くれなゐ」と表現するにより、血の涙を「くれなゐの涙」に置き換えて、「くれなゐの涙」が生まれてきた蓋然性が高いように思われる。その中で、「くれなゐ」という色が重視されることにより、万葉時代から親しまれてきた染料として「くれなゐ」のイメージが加わってくる。また、血の涙を「くれなゐの涙」に置き換えることにより、色彩重視で、涙そのものが白玉から紅色という変色も詠まれるようになるのではないかと考えられる。このように、古今集時代に初めて見られる「くれなゐ」と「涙」との結び付きには、漢語「紅涙」「血涙」に影響されている可能性はあるものの、和歌の詠み方から見ると、それが古今集時代歌人によって変容したものであることがわかる。

六、古今集時代に見られる〈はなすすきと袖〉の構図形成を巡る一考察

「はなすすき」も「袖」も万葉集では愛誦されているが、しかし「はなすすき」と「袖」とが結びつけて和歌に詠まれるようになるのは古今集時代の棟梁歌が初見であり、撰者時代の歌人たちも多く用いる。このように、万葉集になく、古今集時代に詠まれるようになる「はなすすきと袖」の構図形成には、漢詩文の可能性は考えられるが、しかし、はなすすきはもともと日本的なものである可能性が高いうえ、漢詩文には、「はなすすきと袖」の構図にあたる表現が見られないことを踏まえると、別の視点からその形成経緯を考えなければならない。

本論では、〈はなすすきと袖〉の構図の根底にある〈はなすすきを袖に見立てる〉という関係性に着目する。古くから花を錦に見立てることは定着しているが、表現面において、それ以上拡大は見られない。しかし、白詩において、赤系の花を赤い服飾関連のものに表現するという構図が新に出現している。そのような発想を継承し、忠臣・道真は、赤い花に止まらず、黄色の花にも白い花にも応用し、さらなる展開を見せている。その中で、特に道真が白い花を白い服飾関連のものに見立てる例は顕著に見られる。このような道真詩で見られる白い花を白い服飾関連のものに見立てるという構図を素地にして、友則歌では故事を踏まえながら、それを部分的に詠み変えて白菊を白袖に見立てる構図が詠出されている。棟梁歌も、道真例に見られる白い花を白い服飾関連のものに見立てる構図を生かし、それをはなすすきに応用し、はなすすきと袖の見立てを作ったのではないかと思われる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (蒲 姦 艶)				
	(職) 氏 名			
論文審査担当者	主 査	大阪大学	教授	滝川幸司
	副 査	大阪大学	教授	飯倉洋一
	副 査	大阪大学	教授	斎藤理生
論文審査の結果の要旨				
以下、本文別紙				

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 古今集時代における新歌材の形成

学位申請者

蒲姣艶

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 滝川幸司

副査 大阪大学教授 飯倉洋一

副査 大阪大学教授 斎藤理生

【論文内容の要旨】

本論文は、万葉集以後、古今和歌集成立前後の古今集撰者たちが活躍する時代を、「古今集時代」と定義して、その時代に見られる新歌材を検討したものである。新歌材とは、その古今集時代に新たに見られる歌材をいう。それらについては先行研究で検討されることもあるが、多くは漢詩文からの一方的な影響下で形成されたとされる。しかし、その認識は一面的ではないかとの問題意識に基づき、新歌材を取り上げ、古今集時代の歌人たちの歌材創造への模索を具体的に検討したのが、本論文である。本論文は、「はじめに」、一「古今集時代における「松に藤」の構図形成について―「藤詠」との変化との関わりを中心に―」、二「古今集時代における「あやめ草の根」の創出」、三「古今集時代における「松を引く」表現の出現―子日行事との関わりを中心に―」、四「古今集時代に見られる〈もみぢ〉の色彩が歌材として詠まれる経緯と展開」、五「古今集時代に見られる「くれなゐの涙」を巡る再検討」、六「古今集時代に見られる〈はなすすきと袖〉の構図形成を巡る一考察」、「終わりに」で構成される。

「はじめに」において本論の目的と概要を述べる。以下、個別の章の検討に移る。

一「古今集時代における「松に藤」の構図形成について―「藤詠」との変化との関わりを中心に―」は、唐絵に影響を承けたとされる「松に藤」の歌材について検討する。唐絵・屏風絵からの影響だけではなく、「藤のむらさき」という色彩へ着目する藤詠を軸にして、松と藤の色彩の対比ことが、こうした歌材の生成の背景にあったことを論じる。二「古今集時代における「あやめ草の根」の創出」は、「あやめ草の根」が寿命の長さを導くことに対して、万葉集以来の「根」を詠む歌を検討し、さらに中国の神仙伝類に記される「菖蒲根」の影響を見出すことで、この歌材が形成されていったと論じる。三「古今集時代における「松を引く」表現の出現―子日行事との関わりを中心に―」は、新歌材「松を引く」の表現が、宇多天皇の子日野遊の影響を受けて、野辺の松が詠まれ、さらにその松を引き抜き、家の庭に植えるという風習が生まれたことを背景に持つと論じる。四「古今集時代に見られる〈もみぢ〉の色彩が歌材として詠まれる経緯と展開」は、万葉集の〈もみぢ〉が黄色と認識され、白居易の影響下〈くれなゐ〉の紅葉が詠まれるという先行研究に対し、万葉集で確実に黄色の〈もみぢ〉が詠まれたとは言いがたく、却って紅色が表現されていたことを指摘し、白居易詩が葉の色彩を意識して「紅」を強調することに刺激を受けて、古今集時代に〈くれなゐ〉の紅葉が生まれたと論じる。五「古今集時代に見られる「くれなゐの涙」を巡る再検討」は、新歌材としての「くれなゐの涙」が染料と関わることから、漢語「血涙」や「紅涙」の影響を受けつ

つも、万葉集以来好まれてきた染料としての「紅」を加えて新たな歌材となったと論じる。六「古今集時代に見られる〈はなすすきと袖〉の構図形成を巡る一考察」は、先行研究では「任氏伝」「任氏怨歌行」という漢文作品の影響を受けたとされるこの構図について、古今集時代における服飾関連の見立て表現の拡大と連動して生成された表現だと論じる。「終わりに」では、以上の議論をまとめ、「国風的」世界への展開を今後の課題とする。

【論文審査の結果の要旨】

漢詩文からの一方的な影響下ではなく、日本に於ける年中行事との関わり、万葉集以来の和歌の伝統・規範との繋がりを具体的に剔抉し論じるのが、本論の中心であり、最大の成果である。

例えば、四で検討される、〈くれなゐのもみぢ〉について、万葉集では黄色の〈もみぢ〉であったものが〈くれなゐのもみぢ〉へと変遷する過程に、白居易の影響を見るのが近年の研究であったが、それを批判し、そもそも万葉集の〈もみぢ〉が黄色であったのかと疑問を呈し、万葉集においても〈くれなゐのもみぢ〉と認識された可能性を見出し、その流れに白居易の〈くれなゐのもみぢ〉を取り込んで論じたこと、また、五で検討される、「くれなゐの涙」についても、従来、漢語の「血涙」や「紅涙」の影響だと論じられていたのを、万葉集で詠まれた染料としての「紅」が、古今集時代の「くれなゐの涙」で掛詞として詠まれていることを重視して、単に漢語「血涙」や「紅涙」を摂取するだけではなく、涙の色彩を重視する姿勢から、「血涙」という漢語に対しても、「血」の色に重点が置かれ、そこに「くれなゐの涙」の表現を誕生させる背景があったとする。そこに万葉集以来の染料としての「くれなゐ」が加わることを指摘するのだが、古今集時代の歌人たちが漢詩文の表現から影響を受けたという従来の説以上に、歌人たちの摂取の姿勢、また万葉集以来の和歌の伝統の中にこれらの表現を位置づけた点は高く評価される。

また三で検討された、「松を引く」という表現は、これまであまり検討されていなかったが、それを宇多上皇の子日野遊と結びつけ、さらには和歌表現がそれらの行事に触発されて表現を獲得していっただけでなく、独自の展開を遂げたことを指摘していることなどは、これまでの研究史では指摘されなかった成果である。

申請者が俎上に上げた歌材は、これまでの研究で部分的に検討されたり、また、あまりに当然の表現として取り上げられなかったのだが、申請者は、そうした歌材の生成過程を丹念に追尋することで、古今集時代の歌人たちの歌材創造の様相を明らかにしたのであり、高く評価される。

結論を急ぎ過ぎたため説明不足となった部分、また先行研究の把握についても不備が散見するが、申請者の丹念な調査・検討、及び問題意識の高さは今後の研究の発展を確信させるものである。従って、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。